

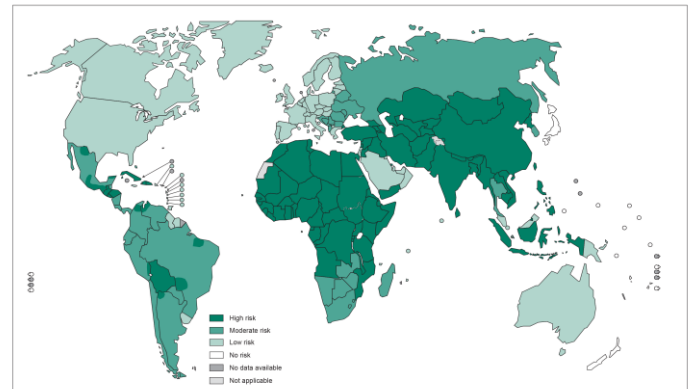
狂犬病ワクチンについて

作成日 2018年7月5日（最終更新 2019年4月2日）

1. 狂犬病のリスクについて

狂犬病（Rabies）は、推定で毎年 59,000 人が死亡しているとされる人畜共通のウイルス感染症です。このウイルス日本など一部の国を除いてアジア、アフリカ、南米などに広く分布しており、犬、猫、コウモリなど狂犬病ウイルスに感染して発症した動物（哺乳類）に、咬まれたり引掻かれたりすることで感染します（半数近くが小児の症例で、感染源となる動物は 99% が犬とされています）。感染後、発症した場合の死亡率はほぼ 100% なので、狂犬病ウイルスに感染した可能性がある場合には、予防が必要になります。

Distribution of risk levels for humans contacting rabies, worldwide, 2013



The boundaries and names shown and the designations used on this map do not imply the expression of any opinion whatsoever on the part of the World Health Organization concerning the legal status of any country, territory, city or area or of its authorities, or concerning the delimitation of its frontiers or boundaries. Dotted lines on maps represent approximate border lines for which there may not yet be full agreement. © WHO 2014. All rights reserved.

Data Source: World Health Organization
Map Production: Centre for Registered
Tropical Diseases (CRTD)
World Health Organization



2. 狂犬病の予防

まずは動物に咬まれないように、安易に近づいたり手を出したりしない事が大切です。もし動物に接触し狂犬病に感染した可能性があれば、発症を防ぐためにワクチンを 5～6 回接種する必要があります。咬まれた後からでも、すぐにワクチン接種を開始することで発症を予防できますが、咬まれた傷の状態によっては、免疫グロブリンという一般に入手が難しい注射薬の治療を追加する必要があります。事前に狂犬病ワクチンをスケジュールに沿って 3 回以上予防接種してあれば、ワクチンを 2 回追加接種することで発症を予防でき、免疫グロブリンの注射は必要ありません。海外で犬などの動物に咬まれた場合には、過去の接種歴に関わらず、すぐに医療機関を受診して、接種歴に応じて 2 回または 4～6 回のワクチン接種が必要となります。

3. 狂犬病ワクチンの種類（裏のページの表をご参照下さい、＜費用については別紙のワクチン価格をご参照下さい＞）

4. 狂犬病の予防接種が推奨される対象者

- 流行地域への渡航者（特に長期滞在者、小児、郊外への滞在）
- 職業上、狂犬病ウイルスを取り扱う可能性のある研究者等

5. 副作用が生じた場合の対応

予防接種後の副作用は接種部位の腫れ等の頻度が高く、数日の経過で自然に軽快することがほとんどですが、日常生活に支障のある副作用に対しては、医療機関を受診いただき、評価の上、対症療法を行うことがあります。また、当院で取り扱っているワクチンは、国内外で多数の接種実績があり、重篤な副作用が起こることは極めて稀ですが、国内未承認ワクチンについては、重篤な副反応が起こった場合に適用できる公的な補償制度がありません。代替として民間企業による自社補償制度の適応となる場合があります。

質問・連絡先

不明点がありましたら、担当した医師までご連絡下さい

〒162-8655 東京都新宿区戸山 1-21-1
国立国際医療研究センター病院 トラベルクリニック
電話：03-3202-7181 03-3202-1012（直通）

3. 狂犬病ワクチンの種類

	国内承認狂犬病ワクチン	Verorab® (国内未承認)	Rabipur® (国内未販売)
製造会社	化血研	Sanofi Pasteur	GSK
承認取得	国内 1980/6/10	WHO-PQ 2005/6/22	WHO-PQ 2002/3/13
投与経路	皮下注射	筋肉注射	筋肉注射
投与量	1.0ml	0.5ml	1.0ml
内容量	不活化狂犬病ウイルス(HEP Flury 株)を参照品と同等以上	不活化狂犬病ウイルス 2.5 units/mL、ヒトアルブミン、マルトース含有、残留ネオアイシン	不活化狂犬病ウイルス 2.5 units/mL、サッカロース、残留テトラサイクリン及びネオマイシン
回数 (曝露前)	1.0mL を 1 回量として、4 週間隔で 2 回皮下注射し、更に、6～12 箇月後 1.0mL を追加する。	0.5mL を 1 回量として、2 回目を 7 日後、3 回目を 21 日後または 28 日後に接種する。	1.0mL を 1 回量として、2 回目を 7 日後、3 回目を 21 日後または 28 日後に接種する。
効力	健康成人 30 名に 2 週間間隔で 2 回接種にて、2 回接種後には抗体陽転率 100%、平均中和抗体価 105 倍。	健康成人 118 名に 0, 7, 28 日に 3 回接種を実施、42 日目の抗体陽転率は 100%。 (SylviePichon, 2013)	健康成人 36 名に 0, 7, 28 日に 3 回接種を実施、48 日目の抗体陽転率は 100%。 (Product Information)
追加接種	必要に応じて 2-5 年毎	必要に応じて 1-5 年毎	必要に応じて 2-5 年毎
禁忌	本ワクチンに重度アレルギー、中等度以上の急性疾患	本ワクチンに重度アレルギー、中等度以上の急性疾患	本ワクチンに重度アレルギー、中等度以上の急性疾患
妊婦・授乳婦	妊娠中の接種に関する安全性は確立していないので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には接種しないことを原則とし、予防接種上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ接種する。	FDA category C : 妊娠・授乳中の影響に関する研究は行われていないが、狂犬病のリスクが大きい場合にも考慮される。不活化ワクチンは、胎児・乳児へのリスク増加を引き起こすことは示されていない。	FDA category C : 妊娠・授乳中の影響に関する研究は行われていないが、狂犬病のリスクが大きい場合にも考慮される。不活化ワクチンは、胎児・乳児へのリスク増加を引き起こすことは示されていない。
効果	狂犬病の感染・発病予防	狂犬病の感染・発病予防	狂犬病の感染・発病予防
副作用	全身症状(頻度不明) : 一過性であるが、発熱を認めることがある。局所症状(頻度不明) : 一過性であるが、発赤、腫脹、疼痛等を認めることがある。	全身症状(頻度不明) : 発熱、倦怠感、頭痛、関節痛、筋肉痛、消化器症状等。 局所反応(頻度不明) : 注射部位の疼痛・発赤、腫脹、掻痒感、硬結。	発生頻度が 10%以上 : 頭痛、発熱、倦怠感、注射部位の発赤等。10%未満 : リンパ節腫脹、食思不振、腹痛、筋肉痛等。0.1%未満 : アレルギー反応等。